『竹取物語（原文）』

※現代語訳は後半部に付いています。

①

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。
野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。
名をば、さぬきの造（みやつこ）となむいひける。
その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。
あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。
それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうて（しゅう）ゐ（い）たり。

②

かぐや姫、「石作（いしづくり）の皇子（みこ）には、仏（ほとけ）の鉢（はち）といふ物あり。それをとりて賜へ」と言ふ。
「車持（くらもち）の皇子には、東（ひんがし）の海に蓬莱（ほうらい）といふ山あるなり。それに銀（しろかね）を根とし、黄金（こがね）を茎とし、白き珠（たま）を実として立てる木あり。それ一枝（ひとえだ）、折りて賜（たま）はらむ」と言ふ。
「いま一人には、唐土（もろこし）にある、火鼠（ひねずみ）の皮衣（かわぎぬ）を賜（たま）へ。
大伴（おおとも）の大納言（だいなごん）には、竜（たつ）の頸（くび）に五色（ごしき）に光る珠あり。それをとりて賜へ。
石上（いそのかみ）の中納言（ちゅうなごん）には、燕（つばくらめ）の持（もち）たる子安（こやす）の貝、取りて賜へ」と言ふ。

③

翁、「難きことにこそあなれ。この国にある物にもあらず。かく難き事をば、いかに申さむ」と言ふ。

かぐや姫、「なにか難からむ」と言へば、

翁、「とまれかくまれ、申さむ」とて、出でて

「かくなむ。聞こゆるやうに見せ給へ」と言へば、皇子たち、上達部 聞きて、

「おいらかに、『あたりよりだに、な歩きそ』とやはのたまはぬ」

と言ひて、倦んじて、みな帰りぬ。

④

(かぐや姫が)「おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。

それをなむ、昔の契ありけるによりなむ、この世界にはまうで来たりける。

今は帰るべきに なりにければ、この月の十五日に、かの本の国より、迎へに

人々 まうで来むず(中略)」と言ひて、いみじく泣くを、

翁、「こは、なでふ事をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞こえたりしかど、

菜種の大きさおはせしを、わが丈 立ち並ぶまで養ひ 奉りたるわが子を、

何人か迎へ聞こえむ。まさに許さむや。

⑤

かかるほどに、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり、昼の明かさにも過ぎて光りたり。

望月の明かさを十合わせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がりたるほどに立ち連ねたり。（中略）

立てる人どもは、装束の清らなること、ものにも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、家に、「造麻呂、まうで来。」と言ふに、猛く思ひつる造麻呂も、ものに酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。

⑥

「文を書き置きてまからむ。恋しからむ折々、取り出でて見給へ。」

とて、うち泣きて書く言葉は、

「（中略）脱ぎおく衣を形見と見給へ。

月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。

見捨て奉りてまかる空よりも、落ちぬべき心地する。」

⑦

ふと　天の羽衣　うち着せ　奉りつれば、翁を「いとほし、かなし」と思しつることも失せぬ。この衣　着つる人は、もの思ひなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人　具して昇りぬ。

『竹取物語（現代語訳）』

①

むかし、いつの頃（ころ）でありましたか、竹取（たけとり）の翁（おきな）という人がありました。

（毎日のように）野山の竹藪（やぶ）に入って、竹を切り取って、色々の物を造り、それを商（あきな）うことにしていました。

本当の名は讃岐（さぬき）の造（みやつこ）というのでした。

（ある日、いつものように竹藪に入り込んで見ますと）一本、妙に光る竹の幹（みき）がありました。

不思議に思って近寄って、そっと切って見ると、

その切った筒の中に高さ三寸ばかりの美しい女の子がいました。

②

かぐや姫は「石作の皇子には仏の鉢というものがあるので、それを取ってきて」と言います。

「車持の皇子には、東の海の蓬莱という山があるそうなの。そこに根っこが白銀で、茎が黄金で、実が白い珠の木の枝の木が立っているの。それをひと枝折って来て」と言います。

「もう一人には、中国の火鼠の皮衣をちょうだい。

大伴の大納言には竜の頸の五色に光る珠があるわ。それを取ってきて。

石上の中納言には、燕が持っている子安貝を取ってきて」と言います。

③

翁は「難しいことばかりのようですね。この国にある物でもありません。こんな難しいことをどう申し上げたものでしょう」と言います。

かぐや姫は「何が難しいものですか」と言うので、

翁は「とにもかくにも申し上げます」と言って、出て行って「かくかくしかじかです。お聞きになった通りのものを見せてください」と言うと、皇子たちや貴族たちはそれを聞いて

「いっそのこと『このへんをうろちょろするな』とおっしゃれないものか」と言って、うんざりしてみな帰りました。

④

(かぐや姫が)「私はこの国の人間ではありません。月の都の者でございます。ある因縁があつて、この世界に来ているのですが、今は帰らねばならぬ時になりました。

この八月の十五夜に迎えの人たちが来るでしょう。」と言って、ひどく泣くので翁は、

「これは、何ということをおっしゃるのですか。竹の中からお見つけ申し、(初めは)菜種ほどの大きさでいらっしゃったのが、(今や)私の背丈と立ち並ぶまでお育て申した我が子を、誰がお迎え申せましょう。絶対に許しません」

⑤

こうしているうちに、宵を過ぎて、午前0時ごろになると、家の周辺が、昼のときの明るさ以上に光りました。

(それは、)満月を10個 合わせたほど(の明るさ)で、(その場に)居合わせた人の毛穴まで見えるほどでした。

大空から人が、雲に乗って降りてきて、地面から5尺ほど上がったところで(浮かび)立ち並んでいます。(中略)

立っている人たちは、衣装の華やかで美しいことは、他に似るものがありません。空を飛ぶ車を一つ伴い、(その車に)薄絹を張った柄の長い傘をさしています。

その中に王と思われる人が、家に、「造麻呂、出て参れ。」と言うと、勇ましく思っていた造麻呂も、何かに酔った気持ちがして、うつぶせに伏してしまいました。

⑥

「手紙を書き残しておいとましましょう。恋しく思われるような時に、取り出してご覧ください。」

と言って、(かぐや姫が)泣きながら書く言葉は、

「(中略)脱ぎ置く着物を(私の)形見としてご覧ください。

月が出ているような夜は、(私のいる月を)ご覧ください。

(お二人を)お見捨て申し上げ参る、空からも落ちてしまいそうな気持ちです。」

⑦

(天人が)さっと天の羽衣を(かぐや姫に)お着せ申し上げたところ、翁を「気の毒だ、ふびんだ」とお思いになっていたことも(かぐや姫の心から)消えてしまいました。この衣を着た人は、思い悩むことがなくなってしまったので、車に乗って、百人ほどの天人を連れて、(天に)昇ってしまいました。